

中学生用攻撃性質問紙(AQS)の作成と信頼性, 妥当性の検討

玉 木 健 弘
(武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科)

Development of the Aggression Questionnaire (AQS) for Junior high school students

Takehiro Tamaki

*Department of Psychology and Social Welfare, School of Letters
Mukogawa Women's University*

Abstract

The objective of this study was to develop a questionnaire which allows measurement of both expressive and inexpressive aggression in students of middle schools. We surveyed the reliability and relevance of this questionnaire. This survey with 1,683 students from the first grade to the third grade of middle schools was also aimed at clarification of factor structure and internal consistency. In order to ensure the reproducibility, 516 students who previously took this survey were again enrolled in this survey 3 months after the first participation. Results of analysis proved that this survey indeed clarified two factors, expressive and inexpressive aggression, and provided sufficient reliability and internal consistency.

Next, we asked class teachers to nominate 495 students who have typical characteristics of either type of aggression in order to investigate the relevance of this questionnaire. The survey results corresponded with nomination by teachers, which suggested high relevance of this questionnaire. This questionnaire was proved to have high reliability and relevance for measuring expressive and inexpressive aggression.

問 題

攻撃性は、これまで数多く研究がされてきた。この中で、子どもを対象とした研究では、学齢期前では攻撃行動を示す子どもは注目され、仲間集団において高い地位が与えられた(Bukowski, Sippola, & Newcomb, 2000)。しかし、学齢期に入ると、学齢期前の状況とは異なり、攻撃的な子どもは仲間から嫌われるようになった(Coie & Dodge, 1998)。このように、攻撃性は年齢が高くなるにつれ、友人関係を悪化させる要因となり社会的に不適応になる可能性がある。そのため、小中学生の研究が重要である。文部科学省の調査によると、小中学生の暴力行為発生件数は、平成26年度において、54,242件(文部科学省, 2015)であった。この中で、中学校における暴力行為発生件数が際だって多い。平成26年度の中学校で発生した暴力行為発生件数は、35,683件であった。これは、小学校の約3.1倍、高等学校の約5.0倍の件数であった。また、この傾向は、10年以上ほとんど変化がないことから、中学校で発生する暴力行為の深刻さがうかがえる。このことから、中学校における暴力行為に対応することが、今後の暴力行為や犯罪行動の抑止に特に必要であると考えられる。

この暴力行為を引き起こす要因の一つに攻撃性(aggressiveness)が考えられる。攻撃性は、他者に対して、有害な刺激を与えようと試みる行動(Buss & Durkee, 1957)の観点からとらえられることが多く、攻撃行動を中心に研究が進められてきた。このため、攻撃性については、敵意や怒りなどの認知や感情の側面に焦点を当てた研究は少数であった。また、Berkowitz (1962)のように、攻撃と敵意とが同意語と

して用いられることがあり、攻撃と敵意という概念が曖昧になっていた。しかしながら、近年、攻撃行動だけでなく、敵意や怒りを含めて攻撃性について研究が行われるようになってきた。例えば、攻撃性とは、感情面として怒り(anger)、認知面として敵意(hostility)、行動面としての攻撃(aggression)の総称(山崎・坂井・曾我・大芦・島井・大竹, 2001)という複合的な要素が強いものであると考えられるようになった。このことから、本研究における攻撃性とは、他者に対して、危害を加えようとする行動や他者への怒りや敵意を持つことと定義した。

また攻撃性研究は、攻撃性を一側面からとらえるのではなく、細分化してとらえるようになった。Hartup (1974)は、攻撃性を敵意的攻撃(hostile aggression)と道具的攻撃(instrumental aggression)に分類して研究を行った。敵意的攻撃とは、他者から攻撃された場合にやり返したり、他者を傷つけようとする攻撃であり、道具的攻撃とは、他者を傷つけることが目的ではなく、他者を支配しようとしたり、他者を攻撃することで、目的を達成しようとするなど攻撃を道具として使う道具的攻撃である。このように攻撃性の細分化については、研究者によって様々である。

そして、近年では、Dodge & Coie (1987)が攻撃性を、反応的攻撃(reactive aggression)と向行為的攻撃(proactive aggression)とに分類して研究を行った。向行為的攻撃は、道具的攻撃(instrumental aggression)と同義語で用いられることもあり、また、この攻撃性の概念から、道具的攻撃として訳されることもある(玉木・山崎・松永, 2002; 2003)。そこで、本研究では向行為的攻撃を以後、道具的攻撃と表記する。まず、反応的攻撃とは、不快な刺激に対してすぐに反応することであり、向行為的攻撃とは、攻撃を手段(道具)として用い、自分の望みを叶えようとすることである(Dodge & Coie, 1987)。この2つの攻撃性は、攻撃を行う目的や攻撃方法は違うが、他者を攻撃するというところは同じであり、攻撃行動を表出している。しかしながら、これらの攻撃性は、怒りと攻撃行動は重視しているが、敵意についてはあまり重視していない。そこで、山崎(1999)は、Dodge & Coie (1987)の分類を参考にし、新たに、怒り感情を表出する表出性攻撃(expressive aggression)と怒り感情をその場では表出しない敵意的な攻撃性を不表出性攻撃(inexpressive aggression)に分類した。表出性攻撃とは、怒り感情を時間をおかずに言語的あるいは身体的に表出し、不表出性攻撃は、怒り感情や敵意を持ちながらその怒り感情を身体的や言語的に表出しないことである。

不表出性攻撃については、敵意を中心として、敵意とは微妙に概念が異なる恨み、猜疑心などの細分化が可能であると思われるが、敵意以外ではこの範疇に入る攻撃反応の細分化には曖昧な部分が多く、測定に使用される尺度の構成概念妥当性も未知の部分もある(坂井・山崎, 2004a; 坂井・山崎, 2004b; 山崎, 2002)。これは、不表出性攻撃の特性が複雑なことを意味している。怒り感情や敵意をもちながら表出しないためには、様々な要因が関連している可能性がある。そのため、不表出性攻撃は、恨みや猜疑心などの概念を切り離して考えるより、敵意やその他の概念を含んだ包括的な概念として扱うことが必要であると考えられる。

これまでの攻撃性を測定する質問紙について、成人用では Buss & Durkee (1957)が作成した、Buss-Durkee Hostility Inventory (BDHI)があり、小学生用では Jacobs, Phelps, & Rohrs, (1989)が作成した Pediatric Anger Expression Scale などがある。BDHIは、暴力(Assault)、間接的敵意(Indirect Hostility)、短気(Irritability)、ネガティビズム(Negativism)、恨み(Resentment)、猜疑心(Suspicion)、言語的敵意(Verbal Hostility)、そして罪悪感(Guilt)で構成されている。また、Pediatric Anger Expression Scaleは、怒りの表出(Anger-out)、怒りの統制(Anger-control)、怒りの反射(Anger reflection)、怒りの抑制(Anger-suppression)から構成されている。

また、中学生を対象とした質問紙でも対象年齢が、高校生を含んでいるものもあり(Kazdin, Rodgers, Colbus, & Siegel, 1987; Vitiello, Behar, Hunt, Stoff, & Ricciuti, 1990)、中学生だけを精度高く独立して調査する質問紙は数少ない。さらに、わが国においては、攻撃性を測定する質問紙自体が少なく、標準化された質問紙でも高い信頼性と妥当性を兼ね備えた質問紙は、ほとんど見あたらない。そして、概念の細分化についての課題として、山崎他(2001)は、統一した見解がないのが現状で、研究者によって、あるいは使用する測定方法によってその詳細が規定されていると指摘している。そのため、細分化された概

念の再構成や因子の集約を行う事が、安定した質問紙を開発するためには必要だと考える。

近年、わが国の研究では、安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井(1999)によって、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(Buss-Perry Aggression Questionnaire, BAQ)が標準化された。そして、この質問紙をもとに、中学生用攻撃性質問紙(Hostility Aggression Questionnaire for Students, HAQ-S; 嶋田・神村・宇津木・安藤, 1998)、小学生用攻撃性質問紙(Hostility Aggression Questionnaire for Children, HAQ-C; 坂井・山崎・曾我・大芦・島井・大竹, 2000)が標準化された。これらの質問紙は、攻撃性を言語的攻撃(verbal aggression)、身体的攻撃(physical aggression)、敵意(hostility)、短気(anger)の4つの側面から測定している。これらの3つの質問紙は、同じ尺度構成で統一して作成されているが、その信頼性の高さは等しくない(山崎他, 2001)。3尺度における4因子の α 係数について見てみると、BAQは.70～.78、HAQ-Sは.71～.80、HAQ-Cは.65～.80となり、低い値を示す因子もある。そこで、より精度の高い質問紙を作成するため、山崎・坂井・曾我・大芦・島井・大竹(2001)が、HAQ-Cをもとに再度分析を行った結果、小学生用攻撃性質問紙(Hostility-Aggression Questionnaire for Children, (HAQ-C)を作成した。分析の結果、4因子を表出性攻撃と不表出性攻撃の2因子に集約し、 α 係数も全体で表出性攻撃.85、不表出性攻撃.80を示した。このことから、4因子構造よりも2因子構造で高い信頼性を有していることが明らかとなった。しかし、問題行動が最も多く発生している中学生の時期を対象とした質問紙は、教師評定用(中学生用攻撃性質問紙教師版; 玉木・山崎・松永, 2002)は存在するが、中学生自身が評価する質問紙はほとんど開発されていない。

中学生は、平成21年度から5年間の文部科学省の調査(2015)において、暴力行為発生件数が3万件以上が報告されている。この点からも中学生の時期は、様々な側面に変化が起こる時期であるといえる。これらのことから、中学生自身が攻撃性を評価することは、問題行動の減少ならびに予防する観点からも必要なことだと考える。そして、教育的意味からも攻撃性を一側面だけでなく、表出性攻撃と不表出性攻撃という対照的な二側面からとらえることで、各攻撃性に合わせた指導を行うことが可能になると思われる。

以上のことから、中学生自身が自分自身の攻撃性を評価することは、意味があり、教育面からも重要なことであると考えられる。また、今回は、道具的攻撃については、測定しないこととした。その理由として、反応的攻撃と道具的攻撃との相関は、先行研究で.70以上を示す(Poulin & Boivin 2000a; Poulin & Boivin, 2000b; Vitaro, Gendreau, Tremblay, & Oigny, 1998)ことから、攻撃性の仮説概念において類似している部分が多いと考えられるためである。このことから本研究は、中学生を対象にして、表出性攻撃と不表出性攻撃に対応した質問紙を作成することを目的として実施された。

調 査 I

1. 目的

中学生を対象として、表出性攻撃ならびに不表出性攻撃を分類する質問紙を作成し、因子的妥当性、内的整合性ならびに再検査法による再現性を検討することを目的とした。

2. 方法

1) 調査対象者

徳島県、香川県、静岡県の中学校4校を対象に調査を行った。各中学校校区には、工業地帯や繁華街などではなく、一般的な住宅街に位置している。そのため、調査対象校の違いは少ないと考えられる。

調査対象者は、中学校1年生から3年生1810名を対象に調査を行った。未記入の回答などを除外した結果、1683名(男子909名、女子774名)を分析対象とした。各学年の人数は、1年生565名(男子309名、女子256名)、2年生552名(男子305名、女子247名)、3年生566名(男子295名、女子271名)であった。なお、再調査は、本調査を行った評定者ならびに被評定者の一部を対象として行われた。

2) 質問紙ならびに実施手続き

本研究で使用した質問紙は、小学生用攻撃性質問紙(山崎他,2001)で分類された表出性攻撃項目 8 項目、不表出性攻撃項目 8 項目の合計 16 項目から構成された。質問項目は、山崎他(2001)が因子分析をした結果、表出性攻撃と不表出性攻撃に分類された項目を用いた。なお、不表出性攻撃は、敵意、猜疑心、恨みなど微妙に異なる概念から構成されていると考えられる。そのため、質問項目は、これらの概念を含んでいると考えられる項目から構成した。項目に対する回答は、「まったくあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「よくあてはまる」、「とてもよくあてはまる」の 4 件法で求めた。なお、Table 1 には、質問項目が示されている。

本調査は、無記名式による各クラス集団単位で、担任教師または教科担任によって授業時間または放課後に実施された。再調査は、本調査終了約 3 ヶ月後に同一のクラス集団に実施された。

Table 1. 中学生用攻撃性質問紙質問項目

項目番号	項 目 文
1	わたしはとても幸せだと思う
2	人に 乱暴なことを したことがある
3	友だちのなかには いやな人が多い
4	人からばかにされたり いじわるされたことがある
5	ふだん仲良くしていても 本当に困ったとき助けてくれない 友だちもいる と思う
6	からかわれたら たたいたり けったりするかもしれない
7	じゃまをする人がいたら 文句を言う
8	わたしのまわりは みんな親切な人ばかりだ
9	わたしの悪口を言う人が 多い と思う
10	たたかれたり けられたりしたら 必ず やりかえす
11	本気で いやだ と思う人がたくさんいる
12	すぐにおこる方だ
13	たたかれたら たたき返す
14	友だちに ばかにされているかもしれない
15	自分を守るためなら 暴力をふるうのも しかたない
16	すぐにけんかをしてしまう

3. 結果および考察

1) 因子的妥当性の検討

本質問紙の因子構造を確認するために、16 項目を対象に男女を合わせた全調査対象者の回答について、主因子法による探索的因子分析を行った。因子構造を検討したところ、第 3 因子までが固有値 1 以上を示した。それぞれの固有値は、第 1 因子 4.69、第 2 因子 2.38 そして第 3 因子 1.13 であった。第 1、第 2 因子の固有値に比べて第 3 因子の固有値は低かった。寄与率は第 2 因子までで 44.17% を示した。次に、男女別に主因子法による探索的因子分析を行った。その結果、男女とも第 3 因子までが固有値 1 以上を示した。第 1 因子から第 3 因子までの男子の固有値については、順に 4.58、2.36、1.20 であり、女子の固有値については、順に 4.94、2.31、1.07 であった。男女とも第 1、第 2 因子の固有値に比べて第 3 因子の固有値は低い値を示した。また、寄与率は男女とも第 2 因子までで 40% 以上を示した(男子 43.34%、女子 45.28%)。

さらに、発達差について検討するために、学年ごとでも主因子法による探索的因子分析を行った。その結果、学年ごとでも第 3 因子までが固有値 1 以上を示した。学年ごとの第 1 因子から第 3 因子までの固有値は、1 年生については順に 4.96、2.42、1.02、2 年生については順に 4.53、2.65、1.31、3 年生については順に 4.49、2.15、1.14 であった。寄与率については全ての学年において第 2 因子までで 40% 以上を示した(1 年生 46.14%、2 年生 44.84%、3 年生 41.50%)。以上の固有値の変化および寄与率から考えて、本質問紙は 2 因子構造であると考えられる。

そこで、因子数を2としてpromax回転を行った。因子パターンは、項目内容から全体、男女とも第1因子が表出性攻撃、第2因子が不表出性攻撃と解釈された。また、第1因子と第2因子で男女で異なる項目は見られなかった。したがって、本質問紙は、男女共通の因子構造を持った質問紙であることが確認された。Table 2には、全体ならびに男女ごとの因子負荷量、寄与率および因子間相関を示している。

尺度項目の選択基準は、(1)当該因子の因子負荷量が.450以上である、(2)当該因子以外の因子に.300以上の因子負荷量がない、(3)当該因子と当該因子以外の因子負荷量の差が.300以上ある項目、(4)共通性が.200以上のある項目とした。まず、全体で基準を満たした項目は、第1因子で7項目、第2因子で6項目であった。次に、男女別でも同様に分析を行った。その結果、全体と同様の結果が得られた。

第1因子では、7項目が項目選択基準を満たしたが、第2因子と項目数を合わせるために上位6項目を選択した。このことから、本質問紙の因子的妥当性が確認され、表出性攻撃ならびに不表出性攻撃の2下位尺度、各6項目、全12項目からなる質問紙が確定した。

Table 2. 因子分析における因子負荷量

項目番号	F 1	F 2
13	.872 (.873/.872)	-.152 (-.179/-.145)
10	.856 (.831/.886)	-.176 (-.187/-.187)
6	.630 (.588/.644)	.097 (.138/.072)
15	.580 (.563/.530)	.040 (.029/.119)
2	.558 (.546/.540)	.101 (.128/.088)
7	.500 (.424/.546)	.016 (.082/-.034)
12	.459 (.515/.509)	.176 (.149/.127)
16	.436 (.475/.440)	.215 (.153/.244)
14	.006 (-.009/.061)	.697 (.710/.659)
9	-.017 (.031/-.024)	.681 (.659/.688)
4	-.055 (-.079/-.022)	.641 (.691/.586)
3	.057 (.092/.047)	.589 (.593/.564)
11	.120 (.142/.099)	.508 (.453/.568)
5	.020 (.016/.059)	.478 (.463/.471)
8	.017 (.039/.024)	-.418 (-.404/-.458)
1	-.007 (-.072/.119)	-.355 (-.275/-.491)
寄与率	29.32 (28.60/30.86)	14.84 (14.74/14.42)
累積寄与率		44.16 (43.34/45.28)
因子間相関		.29 (.30/.35)

注1)四角で囲んだ項目は、基準を満たした項目群を示す。

注2)括弧内の左側が男子、右側が女子を示す。

注3)項目番号1および8は逆転項目

2) 確証的因子分析による因子構造の検討

次に抽出された因子の因子構造が妥当であるかを確認するために、確証的因子分析を行った。分析モデルは、表出性攻撃と不表出性攻撃が互いに相関があると仮定する斜交モデルを用いた。分析の結果、まず、調査対象者全体のモデル適合度は、 $GFI = .98$, $AGFI = .97$, $NFI = .98$, $RMSEA = .04$ となり、高いモデル適合度が示された。次に男女ごとに確証的因子分析を行った。その結果、男子のモデル適合度は、 $GFI = .97$, $AGFI = .95$, $NFI = .95$, $RMSEA = .05$ 、女子のモデル適合度は、 $GFI = .97$, $AGFI = .96$, $NFI = .96$, $RMSEA = .05$ となり、高いモデル適合度が示された。

さらに、全体、男女のいずれの項目においても当該因子への影響係数は有意となった。なお、Table 3には、各モデルの影響係数が示されている。以上のことから、本質問紙の各尺度における因子構造は、高い因子的妥当性を備えていることが明らかにされた。

3) α 係数ならびに再検査法による信頼性の検討

Table 4 には、各攻撃性の α 係数と本調査と再調査との積率相関係数(安定性係数)が全体ならびに男女ごとに示されている。全体の α 係数は、表出性攻撃では .82 であり、不表出性攻撃では .78 といずれも高い値を示した。また、男女で分析を行った結果でも高い値を示した (.78 ~ .82)。

次に本調査と再調査との積率相関係数を求めた結果、表出性攻撃では .81 であり、不表出性攻撃では .75 の有意で高い相関係数を得た。また、男女ごとで分析を行った結果でも有意で高い正の値を示した (.71 ~ .83)。以上の結果から、本質問紙は高い内的整合性と安定性を備えた質問紙であるといえる。

4) 性別における平均得点および正規性の検討

Table 5 には各攻撃性の全体ならびに男女ごとの平均得点と標準偏差ならびに尺度ごとの得点分布における歪度と尖度が示されている。まず、表出性攻撃では、男子が女子より平均得点が有意に高くなり、不表出性攻撃では、女子が男子より平均得点が有意に高くなった。また、正規性については、歪度、尖度ともに 1 を超えておらず正規分布からの偏りは小さいものと考えられる。

Table 3. 確証的因子分析における影響係数

表出性攻撃		不表出性攻撃	
項目番号	影響係数	項目番号	影響係数
13	.90	14	.78
10	.87	9	.73
6	.57	4	.66
15	.53	3	.50
2	.46	11	.44
7	.45	5	.45

Table 4. α 係数ならびに再検査相関係数

攻撃性	α 係数	再検査相関係数
F1: 表出性攻撃	.82 (.80 / .82)	.81 (.77 / .83)
F2: 不表出性攻撃	.78 (.78 / .78)	.75 (.71 / .80)

注) 括弧の中は、左が男子、右が女子を示している

調 査 II

1. 目 的

調査 II において、因子的妥当性、内的整合性、再現性が確認された中学生用攻撃性質問紙について、表出性攻撃と不表出性攻撃の 2 下位尺度の基準関連妥当性を検討する。基準関連妥当性を検討するために、クラス担任教諭によるノミネート法を用いた調査を実施した。

2. 方 法

1) 評定者ならびに調査対象者

評定者は中学校教員 16 名 (男性 5 名, 女性 11 名) で、調査対象者は中学校 1 年生から 3 年生までの生徒 495 名 (男子 268 名, 女子 227 名) であった。各学年では、1 年生 213 名 (男子 113 名, 女子 100 名)、2 年生 137 名 (男子 78 名, 女子 59 名)、3 年生 145 名 (男子 77 名, 女 68 名) であった。

2) 質問紙ならびに実施手続き

調査方法は、表出性攻撃、不表出性攻撃の特徴を示した単文をクラス担任教諭に配り、担任クラスの生徒の中で、各攻撃性の特徴が高い傾向が見られる男女 2 名、低い傾向が見られる男女 2 名、合計 4 名をノミネートしてもらった。ノミネート用紙に示された単文は、表出性攻撃で「腹を立てやすく、暴力をふるうことが多い」、不表出性攻撃で「人に敵意を持ちやすい」という記述であった。

回答に際しては、生徒のプライバシー保護のため、出席番号で回答を求めた。調査用紙は、評定者に郵送し、その後回収された。なお、ノミネートされた生徒の各攻撃性得点は、調査 I のデータを用いた。

3. 結果および考察

1) 基準関連妥当性の検討

各攻撃性において、その特徴が強い生徒を高群、特徴が弱い生徒を低群とし、それぞれの下位尺度別に人数、平均得点そして標準偏差を男女別に Table 6 に示した。攻撃性ごとに群(高低)×性の 2 要因分散分析を行った。その結果、表出性攻撃では、群の主効果が有意であった(それぞれ、 $F(1, 229) = 47.94, p < .001$)。この結果、表出性攻撃の特性が高いと評価された生徒は、その特性が低いと評価された生徒より有意に高い得点を示したことが認められた。このことから表出性攻撃尺度の基準関連妥当性の高さが示唆された。

不表出性攻撃では、群の主効果と群と性の交互作用が有意で($F(1, 219) = 7.48, p < .01; F(1, 219) = 5.17, p < .05$)、性の主効果は有意ではなかった($F(1, 219) = 3.43, p > .10$)。群と性の交互作用が認められたため、単純主効果の検定を行った結果、女子では、高群が低群より有意に高い値を示すことが認められたが($t(114) = 3.67, p < .001$)、男子では、高低群で有意差は見られなかった($t(107) = .68, p > .10$)。この結果、不表出性攻撃の特性が高いと評価された女子生徒は、その特性が低いと評価された女子生徒より有意に高い得点を示したことが認められたが、男子では、認められなかった。この点は本尺度の課題であるが、その他の分析結果から、概ね本尺度の基準関連妥当性の高さが示唆された。

Table 5. 各攻撃性における平均値ならびに分布特徴

攻撃性		平均(SD)	歪度	尖度
F1: 表出性攻撃	全体	15.31 (3.94)	.04	-.37
	男子	16.18 (3.73)	.10	-.43
	女子	14.29 (3.92)	.06	-.44
	性差	$t(1681) = 10.06, p < .001$		
F2: 不表出性攻撃	全体	13.72 (3.51)	.36	.23
	男子	13.45 (3.52)	.40	.24
	女子	14.04 (3.47)	.33	.25
	性差	$t(1681) = 3.48, p < .05$		

Table 6. 表出性、不表出性攻撃における高群ならびに低群と指名された生徒の平均得点

	F1 表出性攻撃				F2 不表出性攻撃			
	<i>n</i>	高群	<i>n</i>	低群	<i>n</i>	高群	<i>n</i>	低群
全体	116	14.24 (3.45)	117	11.28 (3.08)	110	11.99 (3.83)	113	10.77 (2.82)
男子	56	14.66 (3.24)	57	11.52 (3.41)	53	11.04 (3.58)	56	10.86 (3.08)
女子	60	13.85 (3.61)	60	11.05 (2.75)	57	12.88 (3.86)	57	10.68 (2.55)

注) 括弧内は、標準偏差を示している。

以上の結果から、ノミネート法を用いて検討した本質問紙の基準関連妥当性は、それぞれの攻撃性でほぼ認められたといえる。そのため、調査 I で確認された因子的妥当性、信頼性の高さと合わせ、本質問紙の尺度は、信頼性ならびに基準関連妥当性が高いことが示唆された。

総合考察

本研究では、中学生用攻撃性質問紙の標準化を試みた。その結果、妥当性の検討に関して、不表出性攻撃で、やや課題を残すものの、概ね本尺度は、内的整合性、再現性、因子的妥当性、基準関連妥当性を備えた質問紙であることが確認された。このことから、本質問紙は高い信頼性と妥当性を有している

といえる。また、これまで攻撃性を測定する質問紙の中で、攻撃性を分類する質問紙は、いくつか作成されているが (Brown, Atkins, Oaborne, & Milnamow, 1996; Dodge & Coie, 1987), その多くが小学生を対象とした質問紙であった。そのため、多くの問題行動が表面化しやすい時期である中学生を対象とし、その中学生の攻撃性を分類することができる本質問紙の意義は高いものと考えられる。

これまで、中学生の表出性および不表出性攻撃を測定する質問紙は、教師用の質問紙はあったが、中学生自身が測定する質問紙はなかった。また、本質問紙は項目数も少なく、短時間で実施できるため調査対象者の負担も軽い。さらに、教師用と併用することで、教師評価と中学生自身の評価のズレも測定する事ができ、認識の違いから生じる問題行動について検討することが可能になると考える。このように暴力行為が高い水準にある中学生を対象に、簡便な方法で攻撃性を測定できる点は本質問紙の意義の1つだと考える。

また、表出性攻撃および不表出性攻撃における性差の違いを検討した結果、表出性攻撃では、男子が女子より平均得点が有意に高くなり、不表出性攻撃では、女子が男子より平均得点が有意に高くなった。そのため、本質問紙を活用することで、性別に応じた効果的な対応を検討できるようになることは、意義あることだと考える。そして、健康との関連においては、攻撃性がうつ病やストレスを増大させる可能性が指摘されている (武田, 2000; 玉木・山崎, 2004)。うつ病やストレスは、健康的な生活を営む上では負の要因であり、さらに、学校生活の面でもこれら要因が高まると不登校や引きこもりを引き起こすことが推測される。そのため、日常生活および学校生活をより豊かにするためにも、過剰に高い攻撃性は、低減する必要があると考えられる。この点からも本質問紙は、攻撃性と健康面との関連を調査する上でも有用なものになることが期待される。

本研究では、攻撃性を表出性攻撃と不表出性攻撃とに分類したが、先行研究の多くが、攻撃性を反動的攻撃と道具的攻撃に分類して研究を行ってきた。そして、これまでの研究から、攻撃性がおよぼす様々な影響について明らかにされた。しかしながら、反動的攻撃と道具的攻撃の内的相関は、.70 を越える高い正の相関を示していることから (Poulin & Boivin, 2000a; Poulin & Boivin, 2000b; Vitaro, Gendreau, Tremblay, & Oligny, 1998), これら2つの攻撃特性は、かなり類似していると推測される。そのため、仮説概念上での違いはあっても、それぞれが独立して存在していない可能性が考えられる (玉木・山崎・松永, 2002; 2003)。この攻撃特性について、表出性攻撃ならびに不表出性攻撃について見てみると両攻撃性の内的相関は、.29 と低い値を示したことから、表出性攻撃と不表出性攻撃は、それぞれ違った攻撃特性を持っていることが推測される。このことから、表出性攻撃特性と不表出性攻撃特性それぞれについて今後調査を進めていくことにより、本質問紙が様々な問題行動の改善に役立つものと思われる。しかしながら、反動的攻撃や道具的攻撃についても、これまでの研究において明確な違いがあることが示唆されており、今後これらの攻撃性についても研究を進めていくことが必要であると考えられる。

次に、本質問紙の課題については、妥当性の検討があげられる。本質問紙は、教師によるノミネート調査を実施し、基準関連妥当性について検討した。その結果、男子の不表出性攻撃において高低群の差が有意ではなかった。その理由として、今回の方法が、教師による評定であったため、行動特徴が観察しにくい不表出性攻撃の測定が難しかった可能性が考えられる。また、男子は表出性攻撃傾向が高いため不表出性攻撃傾向を表出性攻撃と測定された可能性もある。そのため、妥当性の測定方法として、教師評定だけでなく、仲間評価、面接調査さらに行動観察などを実施しさらなる妥当性の検討を実施することも今後の課題である。

攻撃性は、多要因から構成されていると考えられるため、多くの要因が、複雑に絡み合っている可能性が高い。そのため、今後の攻撃性研究では、質問紙調査だけでなく、長期にわたる行動観察や本人、担任教師、地域住人ならびに保護者への面接調査や知能検査といった個人検査を実施し、多側面から攻撃性をとらえ、問題行動との関連を調査することが必要だと考える。しかしながら、現状では、大規模な実験の実施、長期にわたる行動観察、といったことを行うことはほぼ不可能であることから、質問紙による調査の意義は大きいと考える。この点から、本質問紙は、簡便性、時間的な負担、そして、信頼性、妥当性の面からも有用なものであると思われる。また、これまで作成された質問紙が、攻撃的行為(身

体的攻撃・言語的攻撃)を重視し, 敵意についてはほとんど扱ってこなかった点からも, 相手に対して敵意を持ち続ける不表出性攻撃を測定できる本質問紙の意義は大きいと考える。

引用文献

- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子(1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性・信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- Berkowitz, L. (1962). *Aggression: A social psychological analysis*. New York:McGraw-Hill.
- Brown, K., Atkins, M.S., Osborne, M.L., & Milnamow, M. (1996). A revised teacher rating scale for reactive and proactive aggression. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **24**, 473-479.
- Bukowski, W. M., Sippola, L. K., & Newcomb, A. F. (2000). Variations in patterns of attraction to same-and other-sex peers during early adolescence. *Developmental Psychology*, **36**, 147-154.
- Buss, A. H. & Durkee, A. (1957). An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 343-349.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. (1998). Aggression and antisocial behavior. In W. Damon (Series Ed.) & N. Eisenberg (Vol.ED.) *Handbook of child psychology*. (Vol.3. Social, emotional, and personality development., pp. 779-862). New York:Wiley.
- Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social-information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1146-1158.
- Hartup, W. W. (1974). Aggression in childhood :Developmental perspectives. *American Psychologist*, **29**, 336-341.
- Jacobs, G. A., Phelps, M., & Rohrs, B. (1989). Assessment of anger expression in children: The *Pediatric anger expression scale*. *Personality and Individual Differences*, **10**, 59-65.
- Kazdin, A. E., Rodgers, A., Colbus, D., & Siegel, T. (1987). Children's hostility inventory : Measurement of aggression and hostility in psychiatric inpatient children, *Journal of Clinical Child Psychology*, **16**, 320-328.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課(2015). 平成 26 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査について
- Poulin, F., & Boivin, M. (2000a). Reactive and proactive aggression: Evidence of a Two-Factor Model, *Psychological Assessment*, **12**, 115-122.
- Poulin, F., & Boivin, M. (2000b). The role of proactive and reactive aggression in the formation and development of boy's friendships. *Developmental Psychology*, **36**, 233-240.
- 坂井 明子・山崎 勝之・曾我 祥子・大芦 治・島井 哲志・大竹 恵子(2000). 小学生用攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 学校保健研究, **42**, 423-433.
- 坂井 明子・山崎 勝之(2004a). 攻撃性概念の細分化と形成過程 美作大学・美作大学短期大学部紀要, **49**, 1-7.
- 坂井 明子・山崎 勝之(2004b). 小学生における 3 タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予期に及ぼす影響教育心理学研究, **52**, 298-309.
- 嶋田 洋徳・神村 栄一・宇津木 成介・安藤 明人(1998). 中学生用攻撃性質問紙(HAQS)の作成(2) - 因子的妥当性, 信頼性, 因子間相関, 性差の検討 - 日本心理学会第 62 回大会発表論文集, 931.
- 武田 洋子(2000). 児童期抑うつの特徴に関する一考察: 攻撃性を手がかりに発達心理学研究, **11**, 1-11.
- 玉木 健弘・山崎 勝之(2004). 中学生の攻撃性, 社会的情報処理過程ならびにストレス反応の関連性 学校保健研究, **46**, 242-253.
- 玉木 健弘・山崎 勝之・松永 一郎(2002). 中学生用攻撃性質問紙教師版(AQS-T)の作成と信頼性および妥当性の検討 徳島文理大学研究紀要, **64**, 7-14.
- 玉木 健弘・山崎 勝之・松永 一郎(2003). 児童用攻撃性質問紙(GAQC)の作成と信頼性, 妥当性の検討 徳島文理大学研究紀要, **66**, 19-26.
- Vitaro, F., Gendreau, P.L., Tremblay, R.E., & Oligny, P. (1998). Reactive and proactive aggression differentially predict later conduct problems. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **39**, 377-385.

(玉木)

Vitiello, B., Behar, D., Hunt, J., Stoff, D., & Ricciuti, A. (1990). Subtyping aggression in children and adolescents. *The Journal of Neuropsychiatry & Clinical Neurosciences*, **2**, 189-192.

山崎 勝之(1999). 学校クラス集団における攻撃性低減への総合的教育プログラム－プログラムの理念と攻撃性の発達・顕在化に関する基礎研究－ 鳴門教育大学研究紀要, **14**, 29-41.

山崎 勝之 (2002). 発達と教育領域における攻撃性の概念と測定方法 山崎 勝之・島井 哲志(編) 攻撃性の行動科学 発達・教育編(pp.19-59) ナカニシヤ出版

山崎 勝之・坂井 明子・曾我 祥子・大芦 治・島井 哲志・大竹 恵子(2001). 小学生用攻撃性質問紙(HAQ-C)の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築 鳴門教育大学紀要, **16**, 1-10.

受稿日 2016年9月19日 受理日 2016年12月1日